

エンカウンター (ENCOUNTER)

第250号

2023年2月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第2の手紙講解説教」より (6)

コリント後書が書かれた理由

コリント後書は、7章をもって一段落となっておりまして、一つの区画が本日終わることになります。パウロがエペソで書きました「コリント人への第1の手紙」の反響は非常に悪かった。パウロに対する不信が、信者の中に高まっており、手紙は功を奏しなかったのであります。そこで、パウロは自分でコリントを訪問して、その手紙の目的を達しようとしたのですが、それが却って、その効果が得られず、パウロは落胆してエペソに帰って来ました。そしてパウロは、思い切って大胆に悔い改めを迫る手紙を書きました。その手紙は無くなっておりませんが、その手紙をテトスに持って行かせました。自分の創立したコリント教会の存亡の危機を感じていました。この思い切った手紙でコリントの信者をすべて失うのではないか、福音の真実がコリントの地から消え去るのではないか、と非常に心配致しました。そしてテトスの帰りを待ちました。トロ

アスまで行き、待ちきれず、海を渡ってマケドニアに行きました。しかし、まだテトスは帰ってこない。マケドニアの教会でもパウロに対する反対がありました。特に、ユダヤ人が反対し、迫害しました。そのようなわけで、パウロは非常に悩みました。ついにテトスが帰って来て、コリント教会が悔い改めを持ってテトスを迎えてくれた、といううれしい報告を聞きました。

パウロは非常に喜び、このコリント人篇の第2の手紙を書いたわけでありませう。この第2章12, 13節に、マケドニアでテトスを待っているところが書かれています。2章14節から7章の4節まで、すなわち2, 3, 4, 5, 6, 7章の数章にわたりまして、パウロは喜びのあまり、私は誤解されていたがそのような者ではない、こういう者であると。即ち、使徒の使命、使徒の性質と動機につき、自分をさらけだして書きました。そうですから、ここにはパウロの信仰の最も深いところが展開されており、金玉の如き言葉が出て来ております。特に第5章の14-19節の文章は、パウロが書いたどの手紙のどの部分よりも重大であると学者が言っている場所であります。ロマ書では、教理が理論的に展開されていますが、この理論的な説明よりも、説明すると言わずに自然に出てきたものの方がより分かり易い。したがって、コリント後書は、パウロの信仰と人間を知る上で、最も適切な書簡であります。特に、2章5節から7章4節までに、それが展開されております。

テトスの慰めをもって、神は私を慰めて下さった

「ただ彼の到来によるばかりではなく、彼があなたがたから受けたその慰めをもって、慰めて下さった。即ち、あなたがたがわたしを慕っていること、嘆いていること、またわたしに対して熱心であることを知らせてくれたので、わたしの喜びはいよいよ増し加わったのである。」(コリントⅡ 7.7)

テトスは、パウロからこの手紙を持って行けと言われて、こんな手紙を持って行ったら、コリントはどうなるか、きっとまた、パウロに反対するであろう、という恐れを持っていました。しかし、コリント教会の悔い改めの敬虔な態度を受けたので、予期に反して非常に慰められたのであります。そのテトスの慰めをもって、神は私を慰めて下さったとパウロは言う。人が慰められるということは、また、その同じ慰めをもって神が他人を慰め給うことになる。そうですから、我々の悲しみ、苦しみというものは、本当にそれが神に慰められたとすれば、それはまた即、神が他人を慰めたまうこととなります。我々の小さな悲しみは、大きく言えば人類共通の悲しみと言ってよい。我々は、これを慰め得る神に向かって展開したいものであります。

福音は、その人の真実、その人の生命によって移る

この手紙の第1章から第7章までを見る時に、パウロが如何に誠実であったかが分かります。孟子は、「至誠にして動かざるものは有らざるなり」と言いました。人を責める時も、責めることが目的ではありません。私は福音の真実によって語っているのだから、私の真実を信じてくれと言っています。このような真実を持つ者だけが福音を伝道する資格がある。我々のように、真実のないものがいくら伝道しても、それでは伝わりません。これは当然です。聖書の文句を説明し、大きな教会堂を立て、がやがやと太鼓を叩いて、福音が伝道できるとしたら大間違いです。福音は、その人の真実、その人の生命によって移るのです。

10年後の感想——人間が愛を持つには、十字架の福音以外にない

10年経って復習させて頂きました。孔子が「学びて時にこれを習う、また説(よろこ)ばしからずや」と言われましたが、前に学んだところを復習することは楽しいものであります。今学びましたように、コリント後書の本当にすごい箇所は、第2章の14節から第7章の4節まで、パウロが脱線した場所、即ち、パウロが文章の本筋ではなしに、脱線したこの数章の中に、何とも言えないパウロの信仰が展開されています。…ロマ書のように理屈で積み上げる教理の説明よりも、コリント後書の第3章から第6章までを熟読し給え。パウロの信仰が躍如として出て来ています。パウロの人に対する愛情、人に対する真実は、この信仰と望みから出て来ています。このことを知る必要があります。我々に最も欠乏しているのは、この愛です。口では「人を愛せよ」とか言っていますが、そう言っている者に限って愛が欠乏しています。大体そう見て差し支えありません。愛の豊かな人は、他人に「愛せよ」などと言う必要がありません。身体から愛が発散していますから。そういう人にならねばなりません。クリスチャンは、年を重ねるごとに、みんな嫌な人間になってしまう。男でも、女でも、あれがクリスチャンかと言われるようになる。がりがりで、頑固で、人には親切が無くて、人の悪ばかりを責めている。こういうパウロの信仰と望みを学んだ時に、我々の愛が満ちて来ます。私は、人間が愛、真実を持つには、イエス・キリストの十字架の福音以外にない、と信じます。アーメン

献金の問題

パウロは、コリント後書 7 章までにおきまして、自分自身をさらけ出して、使徒というものはどういう者であるか、また、自分はどのような目的をもって、どんな心構えで伝道しているかについて、信仰の説明はしませんでした。自然に信仰による義を展開しました。キリスト教の山の一つとも言うべき場所があります。特に 5 章の後半におきまして、パウロにとって最も重要な場所を展開致しました。そして、コリント人にたいして、君たちは誤解しておるが、それはそうではないと言って、自分に対する誤解を解き、そして、テトスの報告により、コリントの人々は全部悔い改めて、パウロに対して尊敬と兄弟愛を取り戻したことを知り、非常に喜んだというところで、7 章を終わっております。

今度は、いよいよ、コリント人の了解を得たうえで、献金の問題について語りました。パウロが心にかけておりましたエルサレムの貧乏な兄弟達、ユダヤ人の同胞の本山である教会に対しての贈り物、献金の勧めに入らなければなりません。8 章と 9 章を費やして、この献金の問題を述べ、これは、献金に対する古典をなしている場所とされています。ただ金銭の問題を扱ったのではなく、信仰の問題として、如何に献金という問題が、我々の信仰と深い関係にあるかということを説明した場所でもあります。誠に、金銭の問題は、世俗の如く見えますけれども、誠に重大な問題であると思います。

「Example is better than precept.」(実例は教訓に勝る。)

今まで、誤解があり、やっと誤解が解けた相手に対して、献金による奉仕を勧めるということは、幾分デリケートな問題であります。しかしパウロは、それを実例で示して説得しました。即ち、マケドニヤは、このように恵みによって、献金をしている。汝等もこれにならって欲しいと言っています。私は、実例を示すことは、実に有力な方法であると思います。我々が中学生の頃に学びましたイソップ物語に「Example is better than precept.」(実例は教訓に勝る。)という言葉があります。私は、日本において信者が少ないというのは、実例が少ないからであると思います。クリスチャンとはどういうものかという実例がない。ですから学ぼうとしても学べない。私は、聖書も研究、講義などよりも、本当のクリスチャンとはこういう者だという、その実例があれば、その方がもっと大きな伝道になると確信しています。パウロが、実例を示したのは賢明なやり方であると思います。

パウロは、このようなデリケートな問題を大胆に勧めています。パウロは自分で献金をもらうことなどは考えていません。献金によって、「与うるは受けるより幸いである」と言う深い原理を学ばせるために、そして、それが彼らのためになることを確信しておりました。

患難、苦しみに遭った時に喜ぶ

マケドニアの人々は、信仰のために非常な患難、迫害に遭ったらしい。原語では、その患難のうちに、彼らは喜びに満ちあふれたとあります。これは注目すべき言葉であります。マケドニアと言えば、ピリピを思い出しますが、ピリピと言えば、喜びを思い出します。ピリピ書はこれから学びますが、パウロは牢獄に縛られている時に、喜びを持って讃美歌を歌ったとあります。この頃の新興宗教は、患難、苦しみがなくなることをもって、これを神の恵みとしています。キリスト教は、患難、試練の中に喜ぶ。これが、初代教会におけるキリスト教伝道の成功の秘訣です。これによって、初代のキリスト教は広まりました。私は、現代においてもそうであると思います。…患難、苦しみに遭った時に喜ぶ。それ程に天に宝を持てる者に、内なる生命が充実する時にキリスト教はすごいと分かります。その時キリスト教は人に伝わる。悲しみ、苦しみを恐れ、へこたれているようでは、キリスト教は外に伝わりません。これが初代教会の特徴です。マケドニアの信者は、その標本みたいなものでした。マケドニアから多くの伝道者が生まれました。コリントからは、誰も出ませんでした。コリントは、富と学問の町でした。……道元禅師は「学道の人、まず須らく貧なるべし」（正法眼蔵随聞記四一九）と言っております。

自分自身を奉げることが第1、献金することは第2

貧しい信者は、本当に貧しい人のことが良く分かります。本当に献金する人は貧しい人です。金持ちは、大体において献金をしない。貧しさは、献金の重大なる原因です。レプタ二つをささげた者に対し、イエスは非常に喜ばれました。信仰の喜びに貧しさがプラスされた時に、奉げるといふ精神が実行できます。日本の現教会でもそうです。教会は貧乏人の献金に支えられています。

…ロマ書12章1節には、「兄弟達よ。そういうわけで、神のあわれみによってあなた方に勧める。あなた方の身体を生きた、聖なる捧げものとして奉げなさい」とありますが、これが信者の信仰が分かった者の最大の仕事です。自分自身をささげることが第1、献金することは第2です。使徒ルカは、パウロに自分自身を惜しまず捧げました。パウロの奴隷のようにしてローマについてきました。ルカだけではない。聖書にある名前だけでも、多くのマケドニア人がパウロに仕えて、パウロの伝道を助けています。パウロ一人が伝道したわけではなく、多くの助け手がありました。これは「神のみこころ」、すなわち、神の意思によったことでありました。

偉大なる人になるな、しかし、偉大なることをなせ

献金は、金（かね）の問題ではなく、信仰の問題であります。どれだけ信仰を持っているかの問題です。「金（かね）」を宝としている間は、信仰を得た、救われたとは言えません。実に、「金（かね）」と言うものは万人に関係しています。従って万人にとって、これは一番よいテストになります。そしてこの恵みを鍛錬するチャンスは貧乏人の方に多い。又偉大なることをなすチャンスは凡人の方に多い。総理大臣の仕事は誰でも、たとえ私でも一生懸命やると思います。しかしながら、誰も見ていない台所でする主婦の仕事を一生懸命やる人は少ない。大抵嫌々ながらしています。誰も認めてくれない仕事は嫌いです。本当に偉大なことは、自分の前に置かれた義務を真剣にやることです。この偉大なことは、誰にもチャンスが有ります。リンカーンは、「神は凡人を愛し給う。故に、凡人を沢山作った」と言いました。我々は凡人の価値を認める必要が有ります。凡人の価値が分からないようでは、宗教のことが分かったなどとは言えません。私は諸君に勧めたい。この教会に来る人は「偉大なる人になるな、しかし、偉大なることをなせ」と。

10年後の感想——天国に行く人を信者と言う

「真理は、これを古今に通じてあやまらず、これを中外に施して悖(もと)らず」という言葉がありますが、10年経ちましても、この説教は微動だにもしていません。今これを説教しても恥ずかしくありません。誠に貧しい説教ですけども、この価値は全然変わっておりません。これで通ります。我々はお互いにクリスチャンであるという看板を下ろさねばなりません。まだ金銭(かね)や名誉に未練があるということは、キリスト教のABCが分かっていないことになる。信者のエグザンプルがないから、信者という者がどういう者であるのかが我々には分かりません。信者とは、教会に行き、洗礼を受け、讃美歌を歌っている者を言うようです。しかし、実は天国に行く人を信者と言うのであります。天国に行くか行かないか、自分の心に聞いて見て下さい。そうすれば、はっきりわかります。自分が天国に行くのか、行かないのか、他人に聞く必要はありません。自分で検討したらわかります。天国に行く希望のないものは未信者です。求道者です。

我々はふんどしを締めて聞く必要があります。教会に来たら、福音を真剣に聞かねばなりません。ぼやっと聞いていては、30年、50年聞いていてもものになりません。我々の信仰によらず、我々の行ないにあらず、イエスキリストの贖いによるという。これほどはっきりしていることはありません。それによって我々は天国に行くことにしてもらおう。これを信じるか信じないかにかかっ

ています。この簡単なる原理が、我々が頑迷にして、この世にかじりついているために分からない。金がなければ、この世は不安であるとか、この世で名誉があった方がよいとか、天理教のおみきばあさんが、「金持ちと学者とは後回し」と言われたが、君たちは後回しの方ですか。

コリントとピリピを比べたならば、コリントには学問と富がありました。ピリピにはそれらがなかった。しかし、パウロを助けたのはピリピの人であった。コリント人が助けたとは書いてありません。